施工者に幸あれ 第42回

Post 2020 「大好き東京」を! 日建設計CEO/亀井忠夫

朝倉幸子◉TH-1
illustration:Taco◉Switch・エンタテインメント

■建築家

明快に合わせてくださる会話での，笑い声が印象的である。誰が相手でも，真摯な対応をされる。ご自宅を施工させていただいてから，10数年来のお付合いで，大声を上げなくても通す強い意志と，実行力がある方と，感じていた。時々，無性にお会いしたくなるのは，その辺の秘訣が知りたくなるからかもしれない。

だが，「癪に障ったこと」もあるそうだ。米ペンシルバニア大学へ留学し，早稲田大学の穂積信夫研究室に戻る前に，しばらくNYで生活してみようと，設計事務所HOKで仕事をした。帰国後，一級建築士の受験で，その実務期間が認められなかった。納得できない亀井青年は，（旧）建設省に出向いて，認めさせたという。古谷誠章氏（NASCA主宰・早稲田大学教授）と，一緒に受験し一発合格。見事な行動力です。

アルトサックスとフルートで，ジャズを演奏する。バンドは，大学の同級生を中心に最近結成。気兼ねのない素敵な気分転換になっていることでしょう。

出会いが建築家としてなので，「亀井先生」がしっくりする。庭の木に巣をつくったメジロの成長と巣立ちを温かく見守る，感性の建築家でもあります。

■Designレビュー

日建設計社内では，立場を超えて「さん」付けで呼び合うのが習わしとか。エレベータでばったり会った若手社員に「亀井サン，会いたかった……」と話しかけられる。ご自身が入社された頃は，先輩が後輩を「オジサン」と呼んでいたそうで，「オジサン，この寸法は?」などと，上司に言われていたと聞いた。覇志堂と思わず爆笑。

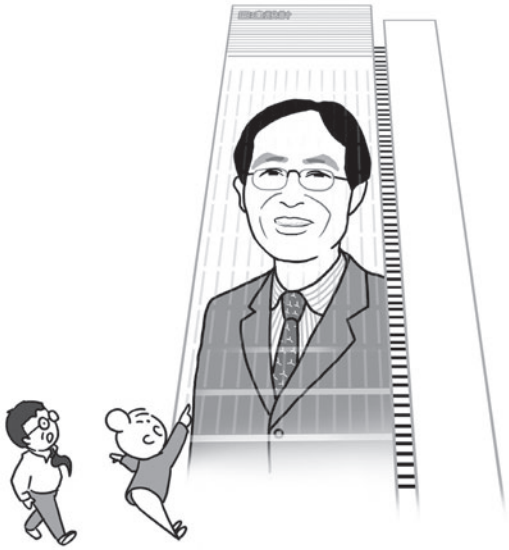
トップへのデザイン報告は，定期的にデザインレビューで行う。社員の誰が参加してもよいとは，優秀な人材はさらに磨きがかかりそうです。扱う建物の規模が大きくて，スカイツリーは背も高い！　堅いイメージの日本のトップ設計会社は，意外にオープンで風通しのよい組織なのです。

■NADとPost 2020

覇志堂の「最近の日建設計さんのデザインは，自由度が増したと感じます」を受けて，「クライアントの幅が広がり，リクエストも多様化してきていますからね，海外は特にですが。デザイン以外の面からコンサルティングする，NAD（NIKKEN ACTIVITY DESIGN lab）を立ち上げました。保育園のフランチャイズのデザインコードをつくるなど，すでに動いていますよ」と。

いきなりモノから入るのではなく，人びとのアクティビティからデザインを実現させる。東京2020オリンピック・パラリンピック以降の都市を見据えて，さらに魅力的で誰もが「大好きと言える東京」を牽引する。

“Post 2020 Grand Design”を考えるために，三か月に一度，建築関係だけではなく，大学，企業，官庁などの方々を招いてミニシンポジウムを行っていると聞いた。その構想は冊子からも，柔らかく伝わってきます。やはり，日本一は頼もしい。

■プラットホーム

物事を整理して考えることは，経営も設計も同じだが，トップとしてまず，「人」のことを考えなければならない。こういう仕事をやりたい，と思って集まった千数百人の社員のことを。彼らの能力を，くまなく発揮できるようにしなければ。一人一人のポテンシャルが，1+1が2ということではなくて，倍にも掛算にもなるようにしたい，と語る。「この会社は，社員のプラットホームなのだから」。